



「三位一体の神」

傘木澄男神父

著名な英国の作家チェスタートン（1936没）はこう書いています。「私がキリスト教を信ずる理由の一つは三位一体の信仰のためだ。もしもキリスト教が人間のつくったものなら、その中心に、理解も説明もおよそ不可能なこのような考え、即ち『唯一でありながら内は三者である神が存在する』という教えなど決して奉じはしなかつただろうからだ。」

本当に神は人間の理解も想像も言葉も完全に絶する存在です。「神は三位一体である」というキリスト教信仰は、神の神秘がいかに豊かなものであるかを告げているのです。宗教学者によると、太古から人間は常に神についてこの感覚を抱いてきました。ですから古代の民族は大てい多神教で、至る所に神の力を認め、戦争や農作や家族の営みなど、あらゆることでいつでも走り寄れる神々にいて欲しいと願い、そのために多くの神々を持ったのです。そこへ一大転換が起きます。ユダヤ教が「神は唯一の存在である」という明確な教義を導入し、こうして「神の力」はすべて単一の源、唯一の神に由来し、そのほかには神々はいない、と信じられるようになりました。（この信仰はキリスト教とイスラム教にも受け継がれます。）そしてイエスの復活以後、事態はまた変わります。イエスの復活を目撃した使徒たちはイエスを人間以上のお方と信じ始め、ご生前のお言葉を思い起こしてそれによってイエスに神性を帰し、父なる神と同一視することなく「イエスは神である、だが何らかの仕方で父なる神とは異なる方である」と信じました。更にその体験の中で彼らは、イエスとも父なる神とも完全には同一視することのできない「聖霊」という第三の神の力を感知して、神と信じました。「神は唯一」という信仰に変わりはありませんが、彼らの神体験はそこを超えて、「この神は何らかの仕方でお三方である」という確信を使徒たちの内に打ち建てたのです。使徒たちのこの信仰を承け継いで宣教に出発した教会は、単純な一神教信仰とは相容れないものとなった福音の信仰、「神は唯一、同時にいかなる仕方によってかお三方」という信仰を、世界にどのように告知して行くかという難問に直面しました。そして教会は数々の困難や異端と闘いながら、三百年かけて漸くキリスト教の神体験の豊かさを擁護する一つの教義に到達しました。教会は325年のニケア公会議において「三つのペルソナの中に唯一の神がおられる。神は三つの位格（ペルソナ）における一つの実体（本性）である」という、今日用いられている信条の定式を決定したのです。

こうして人類は遂に「真の神は三位一体の神である」という真理を知るに到りました。「多神教から唯一神へ、そして三位一体の神へ。」この推移を宗教学者は人類の宗教の自然的進化の過程として説明するでしょうが、私たちキリスト者は、これは神の永遠のご計画による自己啓示の御業であると、驚嘆と感謝をもって認め、受け止めるべきでしょう。教会の明確な教義が決定されたと言っても、これでこの神の秘義が完全に明晰になったわけではありません。神は余りにも偉大な存在です。ただひとつ大事なことが私たちに分かりました。「神が限りない愛といつくしみであられるのは、三位一体の神であられるからだだったのだ」ということです。私たちが三位一体の信仰の前でなすべきは頭をひねることではなく、ただその秘義の豊かさを賛美して神に感謝をお捧げすることだけなのです。（以上）